

歴史遺産を観光に一伊賀市一

社団法人中部開発センター

客員研究員 青山 征人

中部開発センターでは、景観に関する意識調査やセミナー、シンポジウム、機関誌を通じて、景観法の仕組みや各地の事例を紹介するなど啓発活動を行ってきたが、今後は中部圏各地の具体的な取り組みを紹介することによって、景観意識の高揚、「美しい国、まちづくり」を推進していきたい。

はじめに

三重県伊賀市は、2004年11月に上野市、伊賀町、島ヶ原村、阿山町、大山田村、青山町の6市町村が合併し、誕生した。三重県の北西部に位置し、滋賀県、京都府、奈良県に接し、東西30km、南北40km、総面積558.17km²と、県下では3番目の広さである。人口は10万3,000人。近畿圏と中部圏の中間に位置することから、「三重・畿央地域」として首都機能移転候補地に選ばれている。古くから大和街道、伊賀街道、初瀬街道で京都、奈良と伊勢を結ぶ、交通の要衝として栄え、江戸時代には藤堂家の城下町、伊勢神宮参詣の宿場町として賑わった。地理的、歴史的背景から、京・大和文化の影響を受けながらも、独立自尊の気風が強く、伊賀流忍術の伝統を残し、俳聖松尾芭蕉を生み出すなど独自文化を育てた。伊賀市は、合併という基本的な枠組みの変化に加えて、他市同様に少子高齢化、過疎化などへの対応を迫られており、10年後の2016年を最終年とする伊賀市総合計画を策定した。この計画は、地域社会の将来像とそれを実現するための政策を示した基本構想と、具体的な取り組みの基本計画をもって構成し、最初の5年間（2006年から2010年）は明確な数値目標を設定したのが特徴。経済的にも「自立したまちづくり」を実現するためには、農林業の振興、産業の誘致とともに、歴史的遺産を活用した観光振興を進めていく。

1 伊賀市の歴史は古い

伊賀の歴史は縄文時代までさかのぼる。木津川周辺には縄文遺跡や弥生遺跡が多数発見され、全長188mに及ぶ三重県最大級の前方後円墳「御墓山古墳」ほか古墳も多い。大和朝廷時代の672年には、天智天皇の後継・大友皇子と、叔父の大海人皇子が対立する「壬申の乱」が伊賀を舞台に展開。吉野に隠棲していた大海人皇子が大和から伊賀を通して伊勢、美濃と進軍した。大友皇子は自殺し、大海人皇子が皇位を継承した。10世紀に、伊賀は東大寺など荘園に組み込まれたが、その後は伊勢平氏の台頭、源氏の再興などに翻弄され、14世紀の南北朝時代には、同じ伊賀同志南朝、北朝に別れて戦ったこともある。16世紀後半になると、天下統一を目指す尾張の織田信長が南下、北伊勢に侵攻したのを皮切りに、戦乱が続き、天正9年（1581年）には、「天正伊賀の乱」と呼ばれる大殺戮戦を経験した。伊勢全土をほぼ征服した信長にとって、有力大名を持たず、土着の地侍と百姓で自治組織をつくり、信長支配に抵抗する伊賀惣国一揆は目の上のたんこぶ。4万人の軍勢が上野盆地の四方から攻め込み、壊滅させた。その後豊臣時代には上野城主の筒井定次氏が所領没収、安濃津の富田信高が加増・転封になり、徳川支配の慶長13年には伊予・今治の藤堂高虎が封ぜられ、両藩合せて津藩が成立した。石高は伊賀、伊勢、伊予の越智郡内を合わせ22万石。後に5万石を2回加増され、32万3,950石の大名となった。高虎は当初伊賀上野城に入り、津藩としての基礎

を固めたが、その後は津城に移り、上野には初代の城代として藤堂高清を任命した。以来12代に亘って藤堂家が津藩を治め、明治維新を迎えた。

2 上野城の石垣は日本一

宇治山田（伊勢）、桑名、津、四日市の三重県各市が第2次世界大戦で米軍の空襲に遭い、市街地の50—90%を焼失したのに対し、旧上野市を中心とする伊賀市はほとんど被害を受けなかったことが幸いした。歴史的建造物がそっくり残されたことで、観光地としての活路が開かれた。上野のシンボルはなんといっても高台の上野城。現在の天守閣は1935年に復元された木造再建城だが、その石垣は30mと国内有数の高さを誇る。徳川家康は、支配を絶対的なものにするため、藤堂高虎を伊賀に封じ、交通の要衝であるこの地に高い石垣に聳え立つ城を築城させ、豊臣方をけん制した。現在のものは再建城とはいえ、築後70余年を経過すると、梁や柱など木造部分が黒光りし、国宝・重文クラスとはいかないまでも戦後建てられたコンクリート製とは違った城としての風格がある。この上野城の一角に忍者屋敷と松尾芭蕉の旅姿をあらわした俳聖殿がある。忍者屋敷は伊賀国高山村にあった普通の茅葺き農家を昭和に入って移築したものだが、内部はドンデン返しや地下道、抜け道など工夫に満ちた仕掛けをあちこちに施しており、見るものを驚かせる。忍術体験館、忍者伝

承館など付属建物を整備し、忍者姿に扮した男女が迫力満点の忍者ショーを演じ、伊賀観光の目玉の一つ。伊賀忍者のルーツは地理的に近い大峰山や伊賀の四十九院などの山伏修験に発すると聞く。戦国時代には、情報収集や奇襲攻撃のプロとして活躍の場を広げ、信長が本能寺の変で討たれ



写真2 普通の茅葺農家に見える忍者屋敷。ドンデン返しや地下道、もの隠しなど仕掛けが一杯。



写真3 屋敷前で現代の忍者に印を結んでもらった。映画ならサッと姿が消えるが。



写真1 藤堂高虎が築城した上野城。現在の城は1935年に木造にて復元、内部は資料館になっている。堀に面した石垣は30mと国内有数の高さを誇る。



写真4 1942年に芭蕉生誕300年を記念して建設された俳聖殿。芭蕉の旅姿をあらわしている。市内にはゆかりの建物が多い。

た時、友人として招かれた家康を無事誘導した「伊賀越え」も伊賀、甲賀の忍者部隊の働きだった。

また俳聖殿は、1942年に芭蕉誕生300年を記念して建てられた。芭蕉の旅姿を建物で表現したと言われ、丸い屋根は旅笠、階下の八角形の屋根は袈裟、柱は杖、縦長の額は顔を表している。芭蕉は1644年にこの地で生まれ、侍大将藤堂新七郎に仕えながら、京都の北村季吟に師事し、俳諧の道を志した。江戸・深川に居を移し、俳諧師として独立するとともに、精力的に全国を行脚し、『野ざらし紀行』や江戸を出発し、奥州北陸を経て美濃大垣に至る行程600里に及ぶ紀行文『奥の細道』を書き上げた。市内には芭蕉生家、三十番俳諧合『貝おほひ』を編集した釣月庵、芭蕉の高弟服部土芳の草案「蓑虫庵」、遺髪を納めた故郷塚などゆかりの史跡が数多く残されている。

国道163号線を挟んで城、市役所と反対側は、碁盤の目状に地割された旧城下町である。東西に伸びる本町筋など三筋町は商業地区に、三筋町の東端には寺院を集めて寺町とし、城の東は武家屋敷を配した。本町通り、二之町通り、三之町通りには、黒漆喰の虫籠窓（むしかご）や駒寄せ（こまよせ）、海鼠壁（なまこまど）^{（注）}などの時代を経た町家が残る。しかし商店街だけに、店舗を改装したり、建て直すところが多く、連続した伝統的建造物群を形成していないのが残念。

（注）虫籠窓：虫籠（むしかご）のように目を細かく組んだ格子をはめた窓

駒寄せ：現在のガードレールやガードパイプで、人馬が入るのを防ぐために設けた木製の低い柵

海鼠壁：土蔵などの外壁で、方形の平瓦を貼り、目地部分に漆喰を半円形に盛り上げて塗った壁

3 城下町景観形成への取り組み

伊賀市は、歴史ある町並み及び町家を保全しつつ、現代の生活にマッチした「暮らしやすい・暮らしたくなる」まちを目指し、1994年から諸施策に取り組んできた。1996年には松尾芭蕉生誕地や城下町など拠点を歩いて楽しむウォーキングトレイル計画（1997－2000年）を策定、1998年には空



写真5 1644年（正保元年）に生れた芭蕉は29才までこの生家で過ごした。裏の釣月軒で処女句集「貝おほひ」を執筆。



写真6 城下町の本通り、二之町通り、三之町通りには今も漆喰造りの町家が立ち並び。

洞化に歯止めをかけるため中心市街地活性化基本計画を策定した。市街を南北に貫く銀座通りを拡張するとともに、ウォーキングトレイル事業で7カ寺が集中する寺町通、下屋敷の道、塔西坂通などの整備を行ってきた。2001年には市独自の上野市ふるさと景観条例を施行、一部で住民と行政が景観協定を結ぶとともに、保全すべき伝統的な町家33件を指定した。新市誕生後は、ふるさと景観条例をそのまま継承（2004年11月施行）するとともに、政府が決めた景観法に基づく景観行政団体への移行を進めている。2006年度中に三重大と共同で景観計画素案を作成し、2007年度には住民説明会を開いて景観計画を策定する。内容は地区の区域、建築物の形態意匠制限、建築物の高さ制限など。伊賀市が高さ制限にこだわるのは、城下町の景観を色濃く残している上野相生町に高さ43mの高層マンション建設計画が持ち上がったた



写真7 澤田時計店では古時計のコレクションや修理の技が見学できる。



写真9 町の東に7つの寺を集めた寺町通り有事の際には城郭代わりになるよう考えられた。



写真8 道路拡張のため建て替えられた百五銀行は瓦屋根、白漆喰、虫籠窓など伝統的なデザインを取り入れた。



写真10 天下の三代仇討ちのひとつに数えられる「伊賀越仇討」で有名な鍵屋の辻

め。市民の訴えで、裁判に持ち込まれ、2005年11月に「20m以下」に抑えることで和解が成立したが、市民が城下町の景観を破壊することには強く反発した。

4 「ひとが輝く・地域が輝く」

伊賀市は、住み良さが実感でき、自由で幸せな暮らしを享受できる「ひとが輝く・地域が輝く」市を目指す。そのためには生活基盤の確立特に雇用の創出が欠かせず、①持続的な農業、林業の振興②資源ともてなしの心を活用した観光振興③工業、物流企業の誘致を重要施策に掲げる。これらを実現するには交通アクセス整備が大切。幸い道路網は、大都市間幹線道ともいべき名阪国道が東西に貫くほか、国道5路線、主要地方道が発達、関西国際空港、中部国際空港にそれぞれ90分でア

クセスできる好位置にある。しかし東西軸に比べ、南北に連絡する道路が少なく、名阪国道と名神高速道路を直結する高規格道路が必要といえよう。また鉄道網は、市北部にＪＲ関西線とＪＲ草津線、南部に近鉄大阪線、市内南北を結ぶ近鉄伊賀線がある。このうちＪＲ関西線は、大阪と名古屋を最短距離で結び、国土幹線上重要路線であると思われるが、亀山と加茂間は単線、非電化のままであり、市では沿線地域と複線電化の早期実現を目指す考えである。地元にとっては公共交通網の整備は悲願であるが、逆に発達し過ぎると、開発の波が押し寄せる。衛星都市化して、景観を失い、地域性、独自性を喪失するため兼ね合いが難しい。

5 感想

伊賀市は、従来からの忍者、芭蕉、上野城といった観光資源のほかに、広域合併で自然、農林業といった新たな魅力を加え、観光都市としてのポテンシャルは一層高まった。幸い無秩序な開発が進まずに景観が保たれている。現在進められている旧城下町商店街の町並み整備が進展すれば、城下町と旧宿場町や、農業、工芸体験と組み合わせることで観光地としての厚みを増し、一日かけて伊賀散策する観光客は増えるだろう。しかし遠距離からの客を誘致し、宿泊させるにはそれなりの工夫なり、設備が必要。近郊の観光地と広域連携する必要があるし、宿泊施設、駐車場、食堂などの確保が大切である。そうした施設があるのだろうが、探し方が下手だったのか、飛び込みたいと思わせる食堂が見付からなかったのは心残り。高齢化社会になると、人は海外や遠方の観光地より、近場で癒されたいと思うもの。その意味で大阪、名古屋に近く、かつ自然景観、歴史的景観に恵まれた伊賀市は絶好の観光地に飛躍する可能性を秘めている。

参考文献

- (2000)：「三重県の歴史」(山川出版社)
- (2002)：「津藩」(吉川弘文館)
- (2001)：「秘蔵の国の書」(上野市)
- (1999)：「煙りの末」(伊賀上野観光協会)

市長インタビュー

伊賀市長 今岡睦之氏に聞く



「豊かな山林と広い農地が伊賀市の財産。化石燃料が枯渇しても困らない」と今岡睦之(むつゆき)伊賀市長。

略 歴

- 1963年 3 月 大阪工業大学工学部卒
- 1963年 4 月 三重県入庁
- 1970年 4 月 塚本設計事務所入所
- 1975年 5 月 上野市議会議員
- 1993年まで
- 1993年 4 月 上野市長
- 2001年まで
- 2004年11月 伊賀市長就任

三重県生まれ、67歳

―市町村合併は順調に進みましたか。

今岡 町村レベルは、単独で運営できないほど財政的に厳しくなった。財政再建で地方交付税が年々カットされるのに、高齢化社会の到来で、福祉サービス費用は拡大の一途。合併せざるを得ない状況。人口で、最低10万人規模でなければ地方は成り立たない。合併したことで伊賀市は588km²と、三重県では3番目の大きさになり、それだけ可能性が高まった。というのは、将来化石燃料が枯渇して、高騰する時代が来ると思うが、木材資源の豊富な伊賀市は困らない。昭和30年代までそ

うであったように、「薪と炭」さえあれば最低生活は維持できる。豊かな山林と広い農地が増えたことが、合併の最大メリット。直近のことを考えれば、合併したことが良かったか、悪かったか分からない。住民から「行政サービスが後退した」とお叱りを受けることもある。

—効率的な行政運営をする必要があります。

今岡 一般会計で最も予算がかかるのが人件費である。仕事と人員を見直し、削減することを考えていく。それに行政サービスは必ずしも、行政マンがしなければならないものでもない。民間に委託する事業はあるだろうし、「補完性の原則」で、地域や住民と行政と一緒に進める仕事はある。大切なことは他人任せでは決して地域社会は良くならないということ。幸い伊賀地方は大昔から生活習慣が似ており、人の交流、文化の交流が活発であったため、自治体経営も類似点が多く、住民にそれ程戸惑いはないと思う。あってもそのうち理解していただけるでしょう。

—行政運営のかなめともいうべき伊賀市総合計画ができました。

今岡 重点項目として8項目の基本計画を掲げた。①安心・安全、②便利、③快適、④共生・交流、⑤継承、⑥平等、⑦意欲、⑧分権・自治であり、上から順に7項目までは市民アンケートで多数を占めたものを掲げ、8項目目の分権・自治だけを行政側からお願いした。最も多かったものは安心・安全。多くの人が老後の生活に不安を抱いており、心配事や不安が少ない世の中を望むとともに、事故や犯罪のないまちづくりを希望している。困ったことに、この地域も悪質な訪問販売や住宅リフォームが横行、高齢者に限らず、若い層も被害に遭っている。

総合計画の推進に当っては、住民自ら地域に適したまちづくり計画を作っていただき、主体的に取り組んでいただくこと。また計画の進行管理を図るため「指標」と「数値目標」を設定して、これをものさしとし、進捗状況や政策の効果など評

価していくことが特徴。

—景観形成についての考えを。

今岡 人間というのは視覚、聴覚、臭覚など五感でもものの良し悪し、美醜を判断するもの。景観が人間に与える影響は大きく、「いやだな」、「汚いな」という要素をできるだけ取り払い、一見するだけで、心が癒される、安らぎを覚えるものを作る必要がある。景観はのどかな田園であったり、落ち着いた伝統的町並みであったりするが、まず住んでいる地域住民そのものが癒され、安らぎを覚えるものでなければならない。その上、建物だけでなく、里山や、住民の心温まるもてなしの心があって、始めて地域外から人を呼び寄せることができる。城下町の景観を残している三筋町には長い歳月を経た町家が多く残され、毎年10月には国重要無形民俗文化財に指定されている上野天神祭が行われる。観光客が喜んで見学に来てくれるが、果たしてこれをさえぎる形で高層ビルが建ったり、醜悪な屋外看板が立てられたら、観光客は喜び、癒されるだろうか。がっかりすると思う。町並みの景観を守るため行政としては、民家改築や新築に対して一定額を補助している。銀行の建物も鉄筋コンクリート作りだが、外観は白壁、瓦葺、格子造りを取り入れてもらった。ただ行政の力には限りがあり、最も大切なことは住んでいる住民が「この町の景観は自分たちで守っていく」という固い決意があるか、どうかである。その点からいえば、農家の意識の方が高いかも知れない。農業は、今、経済行為としては全く成り立たないにもかかわらず、農地を耕し、草を刈る。雑草だらけにしたら申し訳ないという気持ちがあるからだろうが、商業者もこの商売を止めたら住民に迷惑がかかるとか、町並み景観が崩れるといった意識を絶えず抱いてほしい。意識が高ければ、商店街としてそんなに衰退することはないと思う。

—景観への今後の取り組みは。

今岡 伊賀市は幸い戦災を逃れたため、400年前に藤堂高虎公によって構築された城郭都市の町割

がそのまま現存している貴重なまち。その周辺を信楽高原、大和高原、室生火山群、布引山地に囲まれ、自然豊かな地である。この財産を我々は次世代に引き継ぐ義務があり、都市景観、自然景観の保全に努める施策を展開したい。このため予定通りに2006年度中に景観計画の素案を作成するなどして、景観法に基づく景観行政団体への移行を進めたい。

—雇用創出も大切です。

今岡 中心市街地活性化対策、農業活性化だけでは新たな雇用を生み出すには至らない。工業や流通産業を誘致して、雇用の創出、若者の定着化を図る必要があり、新たな企業用地を確保して、自然環境を生かしながらの産業立地を進める。関西、名古屋を結ぶ名阪国道は、通行料金が無料のため、物流費削減を目指す企業にとっては魅力なはずで、十分需要はあると思う。

—ありがとうございました。